
怪談 白菊

楽雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪談 白菊

【Nコード】

N1567D

【作者名】

楽雨

【あらすじ】

戦国時代の商人・左馬助と左馬助に愛された白菊、白菊の想い人・清鷹の怪談話

この話はあたしが見た話じゃございません。知人から聞いた話です。つまり又聞きなわけですが、馬鹿にしちゃなりませんよ。噂も真実なこと、あるでしょう。

すいません、あたしは話し下手なもので、すぐに趣旨がずれちゃいます。

左馬助という男をお知りでしょうか。その男が、二年前でしたっけ、ほら、おっきな戦があったでしょう。その時分より少し前に、一人の女に会ったそうです。

たいそう美人の芸妓でした。笛が上手かったそうです。あと、夜のお相手も。

左馬助は助平な奴でね、気に入ったんですよその女が。だからぜひお抱えの芸妓、愛人にしたくてね。掛け合ったそうです。女の店は承諾しました。なんせ左馬すけはお得意様々。実入りが増えるからねえ。しかし、女には約束があった。よくある話です。

「お前のような綺麗な女つてのは」

俺は女の袖を引く。白い指が笛を吹くのを止め、黒い瞳が楽しそうに俺を写した。

「どうやってできる」

俺は笑ってそう聞いた。

「そんな世辞どこで覚えるの」

白菊というこの女は、俺が今まで見てきた奴らの中で一番綺麗な女だ。

「普通と同じ方法か」

今度は手首をつかんで側に引き寄せる。

「まあ、助平なこと、左馬助さま」

「まあな」

「ふふふ」

艶かしい、しかし純粋な子供じみた笑い。俺が好きなこいつの仕草だ。手放したくないと思う。身請けをしたいのだと、白菊にそつと言った。もう店には伝えてある。あとはお前の返事のみだと。

「店が承諾しても、あつしはあなたについて行きません」

その答えは俺にとって意外なものだった。

「なんでだ、今以上に贅沢させてやる。お前のために屋敷も建てよう」

鼻息を荒くして俺についてくる幸せを怒鳴った。

「理由をお話しましょう」

俺なんかちつとも怖くない。白菊の目はそう語っていた。

「あつしには先を約束した男がいます」

白菊の男。それは白菊の田舎に住む幼馴染だった。

名は清鷹。

「田舎男にお前が買えるのか」

俺には自信がある。そのへんの小大名より、俺には金があると。

「清鷹は侍、近々行われるであろう戦の後、あつしを迎えに来ると約束してくれました。お館様は清鷹を懇意にしてくださいさつてゐるそうです。もし、清鷹が戦で武將を討ち取れば、褒美にあつしをもらう」
こつちの気持ちも知らず、白菊は清鷹について話し続ける。

「清鷹はそんなに強いのか」

「…武芸はいまいち、お館さまが懇意な理由も、文官としての才が素晴らしいからです」

まさに夢想だ。お前の恋人はすぐに死ぬ。

「夢を見てはなりませんか」

白菊は目を細めた。

「あつしは清鷹を信じています」

もうそれ以上、白菊を見たくなく、さつさと店を出た。

関山というこの男はどうしても好きになれない。中身も外見も、猛々しく乱暴者で単純なのだ。だが、仲間にするならこの男が一番だった。まったく腹立たしい。

「清鷹なんて大嫌いだ。新参者のくせにまんまとお館さまに取り入った」

そう言う酒を勢いよく飲み干した。口の端から、酒と涎が混じり落ち服を汚している。下品だ。料理の食べ方だってない。

「だいたい武士たるもの、槍働きにて名をあげるべきなのだ。あやつがいったいなにしたんだ。あの若造はただ机に向かうだけで」

「わかります、私もあの男が嫌いです」

長い話を聞き続ける気はない。

「戦の混乱の中、清鷹を」

「わかつてる。種子島に当たって死ぬ奴はいくらでもいるからな」

関山が酒気を撒き散らしながら大声で笑った。俺はそれに不快を感じながらもにつこりと笑って謝礼を渡した。

白菊は俺を裏切った。だから、約束に酔いしれるあの笑顔を壊す。後悔させてやる。

俺の手をとらなかったことを。

戦の前後は、人も物も行きかい忙しくなった。しばらくは白菊のことも忘れられた。

戦に勝利したのは地元の大名だった。その情報とともに嬉しいことを聞いた。

清鷹の戦死だ。

関山は成功したのだ。

「駕籠をよべ」

昼間にもかかわらず白菊のいる店へと向かった。早く教えたかった。夢は終わりだと。

「左馬助さま」

小さくねずみのような顔の店主が頭を下げ俺に近寄る。

「白菊の部屋を頼む」

「それが…白菊が部屋には誰も入らないでほしいと」
「ほう」

俺以外から清鷹の戦死を聞いたのだろう。哀れな女だ。今頃、俺の言葉の正しさを考え、涙しているのだろう。

「…話していいのかわかりませんが、左馬助さま、耳に入れてほしいことが」

「なんだ」

俺は気分がよかった。この小男の言葉も聞いてやることにした。

「白菊の幼馴染という男が、今夜訪ねてくると」

おいおい、まだ白菊を狙う男がいるのか。

「気味の悪い男で、今夜訪ねてくると告げてさっさと帰りました。

白菊は男の名を聞いて部屋にこもり、男を迎える準備をしているのです」

「…そいつの名前は清鷹か」

「ご存知でしたか」

関山め。はらわたが煮えくり返る。関山に文句を言おう。

そうしたら次の手だ。清鷹は必ず殺す。

「なあ、酒をもうひとつ頼ませてくれ」

「いざというときに酔われてはこまりますゆえ」

関山は時分は確かに清鷹を討ち取った。と主張し、結局二人で隣の部屋から白菊の部屋を見張ることになった。

本当に嫌だ。

「たしかに俺は清鷹を殺した。俺が直々に清鷹の首を切った」

「ではなぜ、清鷹と名乗る者がいるのです」

「知るか」

白菊はそわそわし、何度も化粧の確認をし、着物を整えている。俺が来るとき、そんなことしていたのか。はじめて見たぞ。その上

等そんな着物。

そして、約束の刻限が来た。

白菊はいそいそと立ち上がり、清鷹と名乗る男を迎えに行った。

「あやつの、清鷹が撃たれたときの面が忘れられん。凄まじい面で俺を食い殺そうとしているようだった」

あれだけ自信満々だったというのに、関山は身震いをしてみせた。単純馬鹿なこいつがこれだけ言っているということは、やはり清鷹は偽者だろうか。なら、こいつを焚きつけて取り押さえてやる。

白菊の部屋の襖が開く。

白菊と男が入ってきた。灯りが少なくて男の顔がわからない。

二人はゆっくり座り、静かに寄り添う。二人の間に絆が見えた。

俺の頭が熱を孕んだ。

「花、灯りを増やしてくれないか。面と向かって話したい」

花とは白菊の本名か。

白菊は名残惜しそうに男から離れ、火を灯した。男の顔が今はつきり見えた。

「き、あ、清た、清鷹」

後ろにいた関山が脂汗をかき始めた。

「清鷹は生きていたか。まあいい。あとで夜道で切り捨ててしまいましょう」

関山に俺の声は届いていないようだった。武芸が苦手だったのだから影武者でも立てていたのだろう。

清鷹は侍というよりも都の貴族のようで、ほっそりとした姿をしている。端正な顔立ちには白菊とお似合いに見えた。俺はまた清鷹が嫌いになる。

「花、拙者は仕事場所が変わった」

清鷹が話し始める。白菊は緊張した顔で清鷹を見つめている。

「新しい主君は拙者を気に入ってくださり、配下になった祝いに二つのことを許された」

清鷹は白菊に微笑んだ。

「ひとつは花と夫婦になること」

白菊にうつすら涙が浮かぶ。それでも笑って清鷹の手を情一杯にぎった。

「…もうひとつは拙者を殺した関山に復讐すること」

関山が負け犬のような悲鳴をあげた。俺は耳を疑った。白菊も驚いている。

「拙者はあの戦で死んだのだ。味方である関山の軍に撃たれ、首を切られた…そこにいる関山に」

清鷹は目だけをこちらに向けた。赤い赤い血走った眼。襖が開きこちらの部屋が丸見えになった。

「開けてくれ!!」

いつの間にか関山は、別の襖から逃げようとしていた。関山はありったけの、強い力で引いているはずなのに、襖は閉まったまま、壊れる気配すらない。

「拙者は閻魔さまに仕える…」

清鷹は座ったまま手のひらを関山に向けた。

「あがつ」

関山がもがき苦しみだし胸をかきむしる。指に血がにじみ、服が破れ、そして。

口から炎を吐いた。みるみる関山が炭にかわる。炭は粉になり飛散した。あとに残ったのは影のような、畳にこびりついた焦げ後のみ。

「鬼になったよ」

清鷹の態度はどこまでも静かだ。しかしだからこそ狂気が宿っている。

俺は身震いした。

殺される。

「花、それでも、来てくれるか。鬼となった拙者のそばに」

白菊、駄目だ。

「白菊！ 駄目だ！ 行つてはならない！」

襖がしまる。邪魔されないため。何度女の名前を叫び叩こうとも、音すらたてない。

「白菊！」

声が聞こえた。

「あつしはあなただけをお待ちしてました」

わかった。わかってしまった。見えなくても白菊は笑っている。

あなたなんて、鬼なんてこわくない。

あなたを愛している。

「白菊！ 白菊！」

俺は無様に叫び続けた。

「左馬助殿、拙者はあなたを知らなかったから、あなたを殺すお許しをもらってない。だから、今夜は見逃そう」

頭の中に鬼の声が響いた。俺の頭は真っ白になった。

白菊と清鷹の部屋、そこは血が飛び散り、凄まじい部屋になっていたそうです。

また、壁には血でこう書かれてありました。

「花清ふたりきり」

二人は結ばれたのでしよう。

左馬助ですか。あれから頭を剃って寺に入り、日々怯えているそうです。

みなさんも、人の恨みになることはしない方がいいですよ。鬼にかかわるとろくなことがない。

（後書き）

昔、阿部定と呼ばれる女性が恋人を独占しようと恋人吉蔵を殺し、「定吉二人きり」というメッセージを残した。という話をなんか可愛いなと思って触発されて作った話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567d/>

怪談 白菊

2010年10月8日15時07分発行